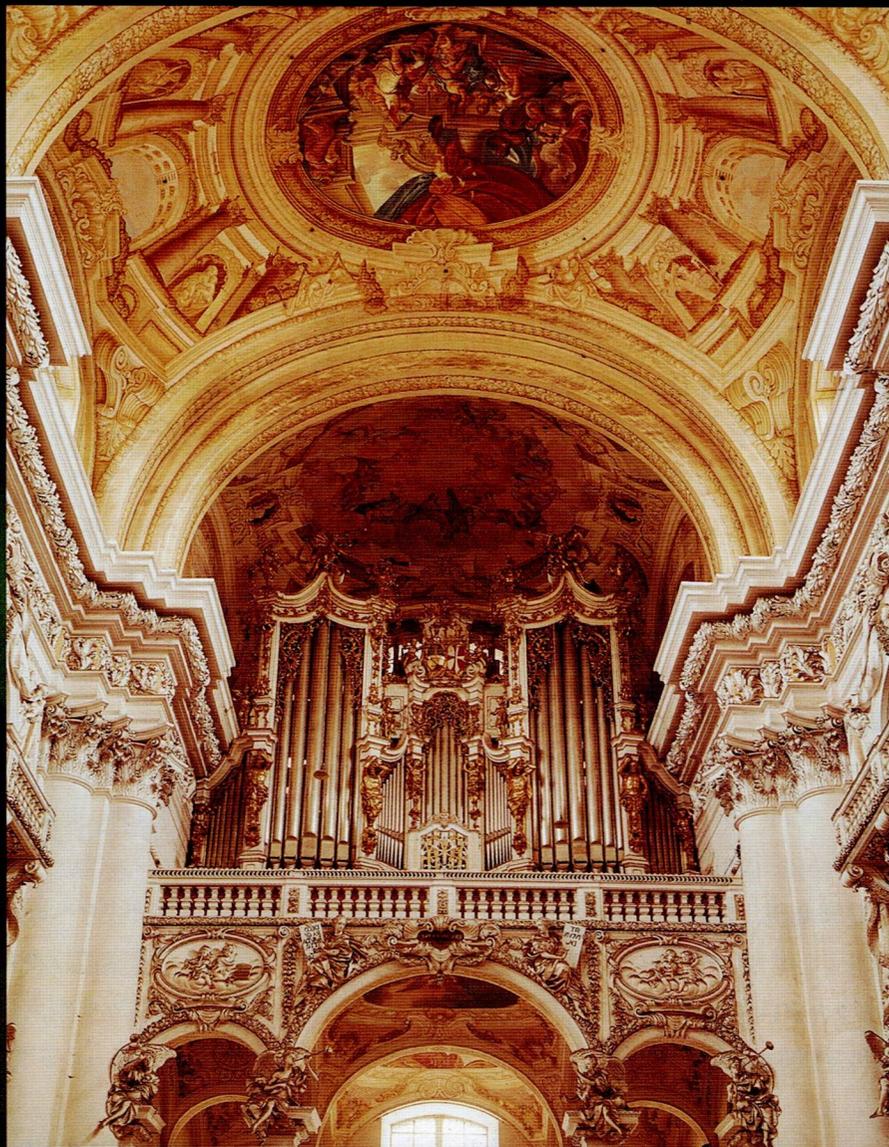


平成26年市川市芸術祭

# 市響

第376回 交響楽の午後



Monastery of St. Florian Bruckner organ of the church  
© Austrian National Tourist Office/ Gruenert

入場無料



指揮 三原明人

管弦楽 市川交響楽団

Photo: Akira Muto

2014.7.20 (日) 午後2時開演 (1時30分開場)

市川市文化会館大ホール (JR総武線・本八幡駅下車)

10歳未満のお子様は入場できません。

お問い合わせ: TEL.047-339-3554 市川交響楽団協会 (篠田) 市響ホームページ: <http://www33.ocn.ne.jp/~ichikyok/>  
主催: 市川交響楽団協会 共催: 市川市 協力: ヤマザキ製パン株式会社 後援: 千葉交響楽団協会

## 本日のプログラム

### シベリウス／交響曲第7番 作品105

Adagio (序奏) - Vivacissimo - Adagio - Allegro molto moderato - Allegro moderato -  
Presto - Adagio - Largamente molto - Affettuoso



### ブルックナー／交響曲第9番 ニ短調

第1楽章 荘重に、神秘的に

第2楽章 スケルツォ (軽く快活に) - トリオ (急速に) - スケルツォ (軽く快活に)

第3楽章 アダージョ 遅く荘重に

## プロフィール



**指揮：三原 明人** (みはら あきひと)

1961年東京生まれ。東京芸術大学でヴァイオリンを専攻、その後桐朋学園とウィーン国立音楽大学で指揮法を小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、カール・エステルライヒャー、ヴァーツラフ・ノイマン各氏に師事。さらにイタリアでゲンナジ・ロジェストヴェンスキー、モーシェ・アツモン、ドイツでベリベルト・バイセル各氏に師事。1989年オランダで行われた「第2回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール」第2位、1993年ドイツ・ハレで開かれた若手指揮者育成のための「DIRIGENTEN FORUM」で最優秀ファイナリスト、1996年ポルトガルで行なわれた「第8回リスボン国際青年指揮者コンクール」第3位 (1位なし) 入賞。

1989/1990のシーズン、ウィーン・フィルのコンサートでレナード・バーンスタインのアシスタントを務め、1991年よりオペラ作品などで外山雄三、広上淳一各氏のアシスタント、1996年ベルリン・フィル来日公演でクラウディオ・アバドのアシスタントを務めるなど研鑽を積みながら、ヨーロッパと日本を中心に活動。これまでにオランダ放送フィル、ドイツ・ハレ国立フィル、ブタペストMAV響、リスボン・メトロポリタン管、フィンランド・クオピオ響、ブルガリアの名門ソフィア・フィル、読売日響、東京都響、日本フィル、東京フィル、東京交響楽団、札幌交響楽団、山形交響楽団、群馬交響楽団、神奈川フィル、名古屋フィル、オーケストラアンサンブル金沢、大阪センチュリー響、広島交響楽団、佼成ウィンドなどを指揮して、コンサート、テレビ、ラジオなどへの放送録音、CD・映画音楽製作など各方面から高い評価を得ている。特に京都フィル定期では、ビニャオのマリンバ協奏曲日本初演のほか、武満の「トゥリー・ライン」、シェーンベルクの室内交響曲を指揮し、各誌で絶賛された。1991年には愛知県立芸術大学管弦楽団指揮者として、現在は東京音楽大学指揮科及び同付属高校で、後進の育成にも務めている。

中学～高校時代に市響ジュニアオーケストラ創設時の初代コンサートマスターを務め、故村上正治氏の薫陶を受ける。芸大卒業まで市響団員としてヴァイオリン及びヴァイオリンで演奏に参加、その後指揮者としても過去に幾度か市響の指揮台に立つなど、市響とは永く深いつながりがある。

## 管弦楽：市川交響楽団 (いちかわこうきょうがくだん)

2016年に創立65周年を迎えるアマチュアとしては全国有数の伝統を持つオーケストラ。メンバーは現在100余名で年齢構成は高校生から70代までの幅広い層にわたり、職業も会社員、教員、主婦など多彩。地元市川市での演奏会を中心に全国各地での文化行事やオーケストラ・フェスティバル等にもしばしば招かれ演奏を披露している。著名な音楽家との共演も数多く経験しているほか、特に地元ゆかりの音楽家との共演にも力を注ぎ、地域の音楽芸術の振興に多大な貢献をしている。市川交響楽団は市川混声合唱団、市川交響吹奏楽団、行徳混声合唱団、市響ジュニアオーケストラの各団体とで構成する市川交響楽団協会の中核として「クラシック音楽をより多くの市民に楽しんでもらおう」をモットーに常に積極的な活動を展開している。

本日の曲目は共に、**祖国に敬愛された**二大作曲家シベリウスとブルックナー**最後の交響曲**です。また二人とも**特徴的なサウンド**を持ち、クラシック音楽の愛好家なら、たとえその曲を知らなくても、それとわかる独自性を持っています。

フィンランドのシベリウスとオーストリアのブルックナー。二人の接点は、研究書によると、シベリウスが26歳の1891年、ウィーン留学の時です。ブルックナー(当時67歳)の交響曲第3番(再演)を聴き、その厳格なカトリック性に感動し「現存する作曲家すべての中で最高!」と婚約者に手紙を書いたと記録にあります。

前半にお届けするシベリウスが生きたフィンランド、は12世紀からスウェーデン領下、19世紀にはロシアの圧制下にありました。その歴史的背景からフィンランドは独立意識が高く、シベリウスは民族的題材にインスピレーションを得た作曲で、国家的英雄とされています。彼のサウンドは北欧の空気の色と、クライマックスでの熱く強い意志を感じさせます。

シベリウスの音楽観を表すエピソードを一つご紹介します。

1907年ヘルシンキフィルハーモニーを指揮するために来たマーラー(47歳で《千人の交響曲》を完成した年)は42歳のシベリウスを訪ねました。マーラー「あなたの曲を指揮するにあたり、なにかお望みは?」シベリウス「別に…」

シベリウスは表面的効果でなく、自身の内的な法則に従うことを尊んだといいます。「シベリウスの交響曲は全てに異なった特徴があるが、それは彼が常に新しいスタイルを求めていたというのではなく、純粋に内的欲求に従ったものである」と研究者は語っています。

**交響曲第7番**は25分弱の1楽章形式です。「交響的幻想曲」という名で初演されましたが、シベリウス自身がその後「追求してきた調和と論理性を具現化したもの」と自分の交響曲のラインナップに含めました。

その2年後、交響曲第8番の作曲を本格的に始めます。名曲を生み出

し続けた彼自身の強い意志と完璧主義が障害となり、19年後の80歳の時、完成間近の交響曲第8番の草稿を自ら暖炉で燃やしてしまいます。このようにして第7番は結果的にシベリウス最後の交響曲となりました。

後半のブルックナーはベートーヴェンの第9交響曲が初演された年に生まれ、ブラームス(犬猿の仲)とほぼ同時代に生きたオーストリア・ウィーンの作曲家です。生涯敬虔なカトリックで、オーストリアの緑豊かな自然の中、教会のオルガンと聖歌隊の響きが彼の音楽家としてのスタートでした。ウィーン国立音楽院の教授に就任後は交響曲の作曲に専念します。

ブルックナーの交響曲は、外野の声に影響され何度も改訂が繰り返されていますが、どれも一本太い軸が通っていて、そこには彼の人生が見られます。それはシベリウスも感動した敬虔で厳格なカトリック性であり、その独自の表現技法です。弦楽器をベースに金管楽器が作り上げるゴシック建築の大聖堂のような壮大なハーモニーとスタイルです。後の研究者は、曲が弦楽器のトレモロで始まる「ブルックナー開始」、オーケストラを一斉に止めることで新たな曲想を始める「ブルックナー休止」など「ブルックナー～」といったネーミングをしています。

**交響曲第9番**は3楽章までも60分を要する大曲です。ベートーヴェンの第9交響曲を意識していると思わせる部分も多く、**第1楽章**の始まりはニ短調で、弦楽器のトレモロと管楽器によるD音のロングトーンで始まりま。ブルックナーが普段第3楽章におくスケルツォを**第2楽章**に置き、**第3楽章**がアダージョである点がそうです。この9度ジャンプが印象的なメロディで始まる第3楽章はブルックナー自身が「私が書いたもっとも美しい緩徐楽章」とのべたもので、この名曲が未完のまま終わることを良しとする深さがあります。またブルックナーが敬愛するワーグナーの独自のハーモニーが思いを込めて流用されているのも特徴です。

本日の出演者

【コンサートミストレス】

立田祥子

【第1ヴァイオリン】

石崎俊信

上田佳津子

大橋一郎

鎌田真貴

亀井玲子

菅原夕

佐藤薫

秦一宜

早川貴子

南達也

【第2ヴァイオリン】

石本恵理

角河友梨

佐分利幸江

滝澤葉子

富田八江子

林美穂

番場美帆

久田しげ子

溝田範子

武藤敦子

村上葉子

吉岡一郎

【ヴィオラ】

内田綾美

大橋かおる

鈴木亜矢子

高野重樹

谷口善樹

奈良林弘子

星乗昭

若林繁

【チェロ】

安部博秀

猪股えり

岩田啓子

倉澤倫子

猿田諒介

中村公一

野中能久

林恭代

日澤優

平得裕子

福原耕二

本澤麻理

【コントラバス】

池田和正

上村啓介

神代順子

小林真弓

番場仙嘉

前田秀晃

村上信乃

渡辺淳子

【フルート】

遊馬陽子

木村眞諭紀

佐藤洋行

番場ますみ

【オーボエ】

鶴田久美子

二村直子

本間広樹

【クラリネット】

秋永直美

井垣貴嗣

時田雄

半藤嗣人

八木良子

【ファゴット】

遠藤由紀子

金坂哲

菅原斉

山内静

【ホルン】

木下泰斗

越取浩一\*

近藤利昭

潮見恵子

嶋村恒夫\*

林田朋子\*

山内正晴

吉川淳史\*

\*ワグナーチューバ持ち替え

【トランペット】

生沼正博

佐藤泰彦

関良馬

田崎真二

【トロンボーン】

齊藤翼

坂田圭

吉川昌憲

【チューバ】

渡邊鉄雅

【打楽器】

都筑裕

和田英恵

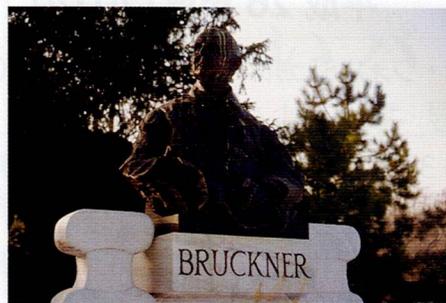
# 本日のオーケストラ配置

本日はご来場ありがとうございます。開演前の舞台をご覧になって「あれっ、いつもと何か違う」とお感じになった方もいらっしゃると思います。本日の交響楽の午後は指揮者の三原先生のご意向で「対向配置」と言われるオーケストラ編成でお届けします。「対向配置」とは第1ヴァイオリンが客席から向かって左手、第2ヴァイオリンが右手と向かい合って配置されるオーケストラの並び方を言います。

第2ヴァイオリンは、第1ヴァイオリンと楽器も同じで、同じ訓練を受け、同じ実力を持ち合わせていながら、伴奏やリズム、ハモリといった目立たない存在として、その責任を全うしている、いわば「人間の出来た方々」の集合です。これまでの市響ではメロディを奏でスター性のある第1ヴァイオリンの裏に座っていましたが、今回は左右に配置することで、両ヴァイオリンが掛け合いで演奏するときにはステレオ効果が、ハモるときはサウンドに広がりを感じられます。

他にも、コントラバスを舞台中央最後列に配置、オーケストラ全体を重低音が包み込みます。またオーケストラ好きのかたでしたら、金管楽器の並び方の違いにも気づかれたのではないのでしょうか？

図にしましたので、どこがどう違うか開演までに探してみてください。

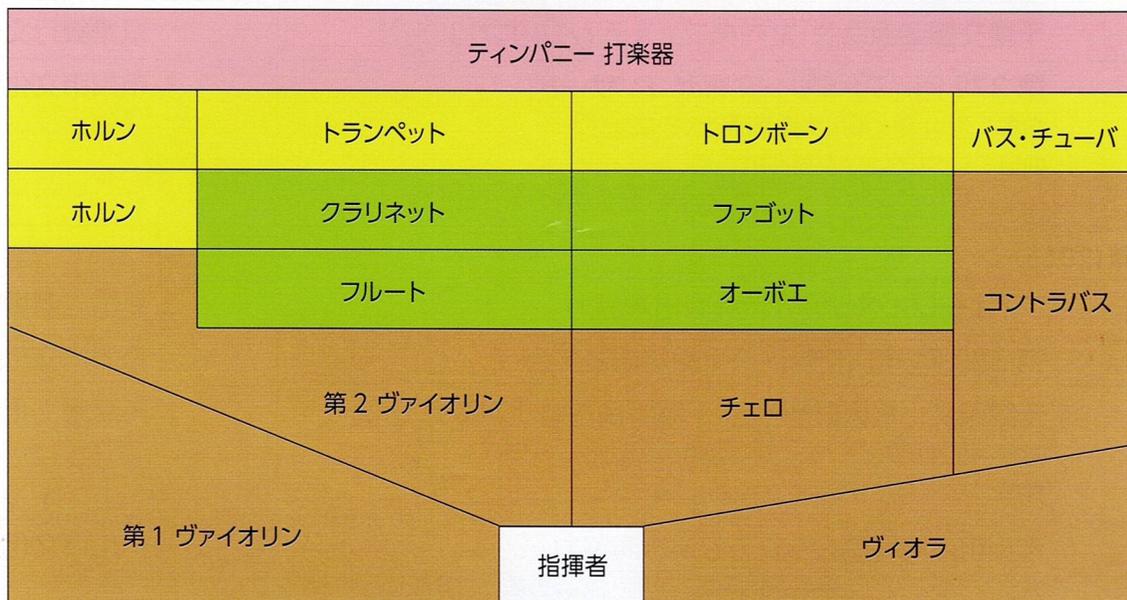


ブルックナー(1824~1896)  
オーストリア・リンツ郊外

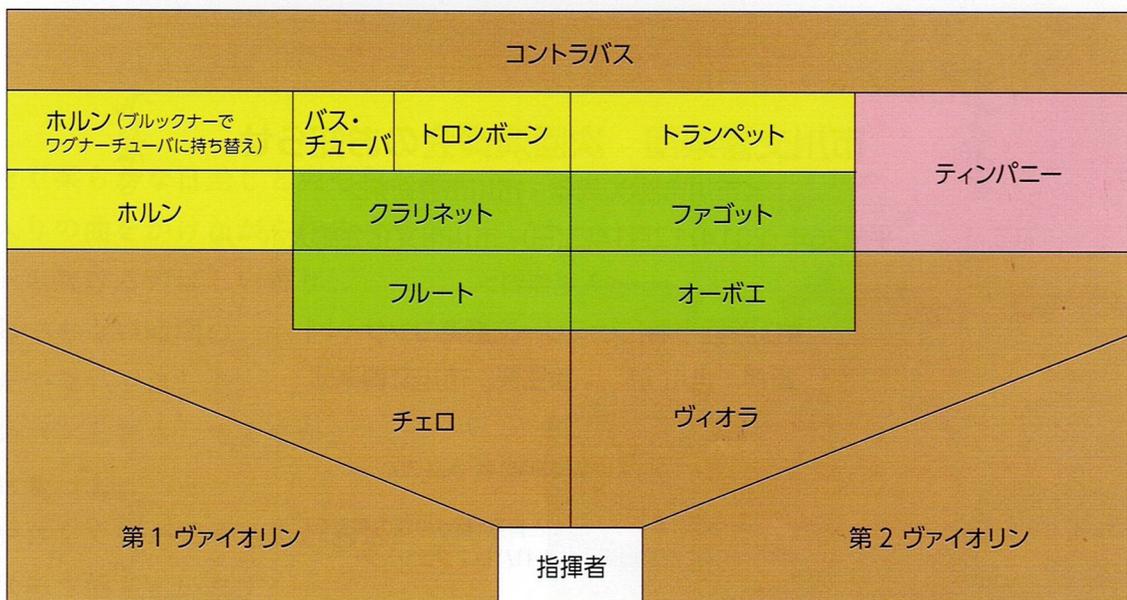


シベリウス(1865~1957)  
フィンランド・アイノラ

## 前回



## 今回





♪本番前日、三原先生に大いに語っていただきました。紙面の都合により、要点のみ書かせていただきます。♪  
○三原先生は以前市響ジュニアオケにいらっしやいまして、中学生の時、創立者の村上正治先生の指揮でヴィヴァルディの四季のソロを市川市民会館でなさいました。日本アマオケの佐世保大会にもブルトレに乗って一緒に参加されました。実家は市川大野ですので今でも市川とは深いかわりをもっています。

○指揮者は厳密にいうと、演奏家ではないので、全く違うものですね。いまでも一緒に弾きたい気持ちがあります。指揮者は野球や映画の監督のようなものです。お客さんには顔は見せない。背中は見せますが、演じるのはプレイヤーです。

○シベリウスを最初に振っていただいた時に、先生はオペラとか、生身の人間ではなくて、木とか自然を表していると言われたのが衝撃でございました。シベリウスの曲は最初はチャイコフスキーとか北の作曲者と似た曲が多いのですが、番号が後へ行くほどこういう傾向が特に強いです。30代で年金がもらえる国民的英雄になったので別荘にひきこもって曲も書かなくなりました。ロッシーニも長生きしましたが、晩年は書いていません。

○シベリウスの7番はインターネットをみると1番人気で2番は2番でした。交響的幻想曲と最初は呼ばれて番号には入っていませんでした。フィンランドで2回演奏しました。2番はもちろん人気は高いのですが、最高傑作で素晴らしいのは7番であるとシベリウスの専門家は言っています。ブルックナーの9番も彼の最高傑作です。

○今回の楽器の配置で、コントラバスが中央の後ろにしてクレームくるかなと思いましたが、その場所はコントラバスの音が等距離でどこからも聞こえ、センターにいるとバランスがいいというメリットがあります。基本は弦楽器がで、管楽器はアンパンのあんこで中にはいり、弦楽器が取り囲んでいる形になります。最近はこのオケでもよく見られて、N響などでもやっています。この曲は木管楽器がとても難しく、超絶技巧が要求される曲です。また、ティンパニーがものすごく難しくテクニックのある方でないと務まりません。2番も独立していますが、7番のティンパニはほとんどソリストです。

○第二ヴァイオリンが右側の対向配置にされた意図は？この配置はブルックナーのためです。シベリウスは必ずしも対向配置でなくともよいのですが、ブルックナーは絶対これでないと。この時代のウィーンのオーケストラは皆こういう配置でした。マーラーの後に変わってしまいました。第一次大戦頃まではこれが普通だったのですが、レコーディングというものが始まって、ステレオ録音で高い音が左から、低い音が右から出てくるということで右側にチェロが配置されました。それだけの理由です。ストコフスキーが高い順に並べようといったのです。ヨーロッパのオケの人はこの配置をアメリカ式と言っています。レニングラードフィルは昔からこの配置です。春の祭典もこれです。ウィーンフィルは一時変えましたが、最近またこの配置にもどしました。日本でやらないのは保守的な考え方の方が多いからなのでしょう。……まだまだ大変興味あるお話が続きますが、誠に残念です。星